
ARCADIA ver1.00 **美しき裁断者**

Wiz Craft

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARCADIA ver1.00 美しき裁断者

【Nコード】

N8766R

【作者名】

Wiz Craft

【あらすじ】

ARCADIAシリーズ・掌握編。マリンフラワー号の船上で起こった少女を巡るプレイヤー間の衝突。事態はGMが介入するほどの深刻な様相に。 §メインプレイヤー § Mause, Fezariorio §ログ方式 § World View

旅客定員数二千名を誇る定期船マリオンフラワー>Marine Flower<号。その美しい外観から『海洋の花』とも謳われるこの船は一日に七便、エルムの村からレクシア大陸に存在する港町ステイアルーフに向けて出航している。マウス達は午前便で、エルムの村から旅立ったのだった。

エルムからステイアルーフまでは普通定期船では四十八時間の航程を要する。いわゆる旅船というものに乗ったのは現実でもなかなか味わえない経験だった。その体験に心を躍らせる二人。素直に感情を表に出して大喜びするマウスとは対照的に、普段は冷静なフェザリオでさえも、そんな興奮を隠し切れない乗船者の一人と化していた。

蒼海の美。その世界の美しさは変わる事は無い。甲板で潮風を充分に浴びた二人は、高鳴る胸の鼓動を抑えながら、既に点々と化したタイムネイル諸島に別れを告げた。

「さて、それじゃ船上のバカンスと洒落込むか。飯行こうぜ」
「僕、もうお腹ぺこぺこ」

フェザリオの言葉に笑顔で後に従うマウス。

屋外の階段を登り二階、第二甲板のレストランフロアへと赴く。真白なテーブルと椅子が並べられたオープンテラスにはガラス張りの涼しげなレストランが建っていた。

レストランから漏れる光に誘われるように足を向ける二人。大理石のような光沢を持つ美しい石柱を潜ると、頭上に掲げられた青地の石版に白の刻印で記された『CREWS x CREWS』という文字が目映る。

店内に入るとまずそこには端末が配置されたカウンターが並んで

いる。入口から中で食事を取る冒険者達の様子を覗くと、そこでは立ち上がっては所定位置に並べられた料理を取り自ら配膳する様子が窺がえた。

「ここのバイキング美味いんだよな。さつさと券売機でカード発行しようぜ」

そうして、手早くPBを端末コードに接続したフェザリオは、カードを発行してマウスにひらひらと振って見せた。その様子を見て手早くカードを発行するマウス。

発行したカードをバイキングエリアの入口に設置された改札機に通す。ここでプレーヤー認証とセキュリティチェックが行われる。隣でカードを持たずに侵入した冒険者が赤点滅の光と共に妨害板で弾かれるのを見て、マウスは少しビクついた様子で腕を浮かせながら通って行く。その姿に微笑を浮かべながらフェザリオは隣の冒険者に券売機で購入するように一言告げる。

中には赤地に美しい黄金色の紋様が描かれた絨毯が敷き詰められていた。その上には黒の支柱に真赤なテーブルクロスと椅子が空間を彩っていた。

「思ったより空いてるな。適当に窓側座ろう」

フェザリオの誘導に窓際の席に腰を下ろす二人。

窓から望める景色は、煌くの蒼海。その景色を前に豊かな食事を装い始める。

真白な花卉のように美しいシーフラワーという海草のサラダ。エラム近海の特産であるスキュワレという体長一メートルにも及ぶ巨大な海老の姿蒸し。ピノと呼ばれる海底に生えるという茸きのこを使った海の香り豊かなパスタ。そんな見た事もない海洋生物の料理の数々に舌鼓したじりみを打ちながら、船上のレストランを満喫していた。

「食事が終わったらカジノ行こうよ」と食後のコーヒーを口元に当てるマウス。

彼の言う通り、この船の三階である第三甲板にはカジノが存在するようだった。

フェザリオは灰皿に香煙草を擦り付けながら、口から煙を吐き出す。

「ルーレットでもやって金増やすか」

「減らすの間違いでしょ。フェザって歯止め効かないから心配なんだよ」

他愛もない会話に微笑する。そんな折だった。

ふと隣のテーブルから怒号が飛び、周囲の冒険者の注目が集められる。

「てめえ、何ポケットと突っ立ってんだ。普段役に立たねえんだからこついう時に働け。さっさとビール持って来い」

「は、はい……ごめんなさいです」

栗色のおさげ髪に大きな黒の瞳。大柄の男の言葉にビクツと身体を震わせた少女は、その足で食膳の方へと向かい小走りに駆けて行く。まだ年端も行かないその小さな影を睨み付けながら、大柄の男を含めた一向はテーブルに付き腰を下ろす。

一体彼らはあの少女とどんな関係なのか。少女がビールを持ってくると男二人と女一人は礼も言わずにビールを奪い、彼女には座らせませず今度は酒の肴を要求する。

「何でもいいから掴みになるもん持って来い。早くしろ!」

少女が無言で頷き走り出そうとすると大男の怒号が再び飛ぶ。

「返事しろよ、てめえ！」

「はい……！ ごめんなさいです」

縮こまった少女の身体が再び駆けて行く。その姿を周囲の冒険者はただじっと見守っていた。

食事を終え、食後のコーヒーを楽しんでいたマウスとフェザリオもその手をふと止める。

「なにあいつ、食事中に気分悪いね」と振り向いて睨みつけるマウスを制すフェザリオ。

「止せよ、ほっとけ。視線合わせるな」

その言葉に納得の行かない表情でマウスがテーブルに向き直る。

この時、既にマウスは連中の名前を確認していた。

三十代前半に見える大柄の男がヴァルコイド Valcoïd、もう一人二十代前半の細身の男がフランスキ Fransky、そして駆け回る少女の様子を怪訝な表情で睨みつける三十路前の女がベラ Bela。不当に虐げられている少女の名はキティ Kittyと記されていた。

それだけ確認するとPBを閉じて黙って静かにコーヒーを口元に当てるマウス。

プレイヤー間の揉め事にはなるべく関わらない事が賢明だ。無闇に首を突っ込んでみてもろくな結果にはならない。彼らの関係は傍目には定かでは無いが、仮にここで彼女を助けたとしても、もし彼らの関係が親子のように血縁関係だったとしたら、現実に戻って彼女がさらなる虐待を受ける可能性がある。その可能性が零で無い限りここで安易に動く事は彼女を危険に晒す事になる。ここは様子を見て万が一の際はサポートセンターに虐待報告として調査を依頼する、

それがマウスの考えた選択肢だった。

椅子に座らせて貰えずただ料理を運ぶ少女の姿。突きつけられる怒声にただ必死に命令に従う健気なキティ。次第にその光景は周囲に明らかに痛々しく映り始めていた。

数人の冒険者がここで立ち上がり彼らの元へと近寄って行く。

「見てらんないな。あんた等。その子とどういう関係なんだ」

周囲の視線がその茶髪の青年に一斉に向けられる。プレイヤーネームはマイキー。

大柄の男、ヴァルコイドは青年を一瞥すると鼻で笑う。

「てめえに何か関係あるのか。部外者はすっこんでろ」

その言葉にはマイキーの仲間と思われる金髪に青い瞳の女が答えた。プレイヤーネームはアイネ。

「関係あるわ。食事中に随分と気分を害されたもの。その子が可哀想だとは思わないの？」

その言葉に次第に怒りを露にするヴァルコイド。

食事を持ってきたキティはどうする事も出来ない様子でただじつとその場でうろたえていた。

次の瞬間、テーブルが男の片足によって大きく蹴り上げられる。食事ごと宙を舞うテーブルの様子に周囲が騒然とし始める。

「てめえら、舐めてるのか。こいつはこの世界で一人今みたいになるたえてる所を俺達が拾ってやったんだよ。こいつは意志を持たない屑だ。だから俺達が導いてやってるんだ。文句あるか！」

ヴァルコイドの怒声に負けずと青年の傍らに居た黒髪に長髪のジヤックという名の男も言い返す。

「意志を持たない屑だと？　こんな幼い子がこの世界に一人で来たら不安になるのは当たり前じゃねえか。この子はお前達を頼りにしてるのに、お前等の扱いがどれだけ彼女に恐怖を与えてるか、それが分からねえのか」

「ごちゃごちゃ五月蠅えんだよ！」

ここでヴァルコイドが抜いた銅斧が空を斬り、目下のテーブルを真っ二つに両断する。それは明らかに対人に向けられた凶行だった。だが、流石は早期の段階でレクシア大陸への渡航権利を得た冒険者達だけある。銅斧が振り翳された瞬間、制止者達は既に一步身を引いていた。

ここで青年もまた銅の短剣を引き抜く。その様子を外野で微笑を浮かべて見つめるヴァルコイドの連れフランスキー。彼の隣で両手を広げたベラが「お気の毒」と一言呟いた。

「短剣を引き抜いたって事は、なあ」

迫るヴァルコイドの気迫にたじろぐ青年。

「これからお前をぶっ殺しても文句無えって事だよな！」

銅斧を振り翳し狂気表情で青年に襲い掛かるヴァルコイド。

蹴り飛ばされたテーブルの残骸の直撃を受けた青年の一瞬の隙に、ヴァルコイドの一撃が青年を襲う。鈍い衝撃音。頭部に斧の直撃を受けた青年の身体が屈んだ瞬間、ヴァルコイドの強烈な蹴りが青年の身体を隣のテーブルまで弾き飛ばす。

周囲から巻き起こる悲鳴。倒れた青年は地面に伏せたまま微動だ

にしなかった。

「俺に逆らうんじゃねえよ！ 逆らう奴は皆こうなるんだ！ よく覚えとけてめえら！」

その余りの光景に誰もが竦み上がったその時だった。辺りが静まり返る中、ヴァルコイドの元へと歩み寄る影。

「何だてめえ、ぶつ殺されたいのか！」

怒声にまるで怯まず近寄った影は男に近付くと、その顔面に唾を吐き掛ける。

唾を吐き掛けたのは紛れも無いあのマイキーだった。

「汚い面がこれで少しは綺麗になったか。感謝しろよ」

マイキーの言葉にわなわなと身体を震わせる大男。

「ぶつ殺してやる！」

大男が叫ぶと同時に突き出される手首。マイキーは軽くそれを片手でいなすと内側に向かつて捻じ込む。関節に走る衝撃に自然と身体を折り曲げた男の身体がその場に沈む。

その様子を見てジャックは香煙草を口に啜えながら一言「終わったな」と呟いた。

睨み付けるヴァルコイドの形相を物ともせず、膝付いた大男の顔を掴み引き上げるマイキー！。

「お前がこの子の親じゃなくて良かった。これで心おきなく潰せるからな」

マイキーの言葉に外野のフランスキーが立ち上がったその時だった。

まるでその動きに牽制を掛けるかのようにジャックが彼の前に立ちはだかる。

「残念だったな。あいつリミッター外れちまってる。ああなったら俺にも、もう止められねえよ」

周囲が息を呑む中、今マイキーが男の顔面に蹴りを入れようとしたその時だった。

突然、周囲の空間が歪み、円状の歪んだその空間が光を放出する。その空間から今ゆっくりと現れる人影。

「何だ……？」と歪みに視線を凝らすジャック。

蒼白の翼をはためかせ、白銀に輝く鎖で出来た三尾を纏ったその姿。美しい白羽根で飾られた羽帽子と、目を覆うように装着された妙な機械から、その表情を窺う事は難しい。

天使と喻えるにはその姿は厳しく、裁定者と呼ぶにはあまりに美しい。この美しき裁定者の存在はこの世界ではある呼称を持っている。

当惑する一同を前に今彼女が皆に向かって一礼した。

「まさか……」

躊躇うマイキーの頭に過ぎる言葉。そう、彼女こそが。

Game Master >> ゲームマスター << だ。

輝きの中から舞い降りた美しき裁定者。蒼白の翼をはためかせ、

白銀に輝く鎖で出来た三尾を纏ったその姿。美しい白羽根で飾られた羽帽子と、目を覆うように装着された妙な機械から、その表情を窺う事は難しい。

天使と喩えるにはその姿は厳しく、裁断者と呼ぶにはあまりに美しい。

一同が当惑する中、緩やかに歩み出たGMは破壊されたテーブルの残骸に手を伸ばすと、静かにその口を開く。

「Code 2 | 1098 Game Master Patlis
ia これより審判を開始します」

冒険者達の視線が注がれる中、彼女は銀色の錫杖じやへんじやうを取り出すと大きく回転させ始める。

「これよりプレイ検証を開始します。リプレイ中は冒険者の皆さん私語をお慎み下さい」

「Area Ocean of Sclame B-13 X21
1 Y253 Time Record Before 15 m
inutes」

GMの言葉と共に周囲の景色が歪み灰色へと霞んでゆく。モノクロになった世界の中で冒険者達はただ互いの姿を確認し、彩色を失ったその周囲の光景に言葉を失う。

移り変わったこの世界で色を持つ者は、GMとそしてその場に居合わせた冒険者達だけだった。

そして、色を持つ冒険者とは別にまるで彼らの身体から湧き出るかのように現れた灰色の分身達。彼らはまるで、再生機の巻き戻しのように冒険者達の動きを高速でトレースすると十数秒後には指定位置に止まり、そして静かに音声を持って語り始める。

「返事しろよ、てめえ！」と、鳴り響く男の怒声。

「はい……！ ごめんなさいです」

バイキング台へと駆けて行く少女の姿がそこには鮮明に映し出されていった。

少女が不当に扱われるその様子に言葉を失い眺める冒険者達。暫くするとそこには立ち上がる一人の冒険者の姿。

「見てらんないな。あんた等。その子とどういう関係なんだ」

正義感溢れる青年の言葉。

「てめえに何か関係あるのか。部外者はすつこんでろ」

「関係あるわ。食事中に随分と気分を害されたもの。その子が可哀想だとは思わないの？」

アイネの言葉に少女はどうする事も出来ずただその場で当惑する。次の瞬間、大きく蹴り上げられるテーブルが宙を舞う。

「てめえ、舐めてるのか。こいつはこの世界で一人今みたいにするたえてる所を俺達が拾ってやったんだよ。こいつは意志を持たない屑だ。だから俺達が導いてやってるんだ。文句あるか！」

男の暴拳が鮮明に浮かび上がる。

「意志を持たない屑だと？ こんな幼い子がこの世界に一人で来たら不安になるのは当たり前じゃねえか。この子はお前達を頼りにしてるのに、お前等の扱いがどれだけ彼女に恐怖を与えてるか、それが分からねえのか」

「ごちゃごちゃ五月蠅えんだよ！」

振り下ろされた銅斧がテーブルを両断する。

静まり返る場内。冒険者達はただ黙って彼らのそのやり取りを見守っていた。

身の危険を感じた青年が短剣を引き抜いたその時。

「短剣を引き抜いたって事は、なあ。これからお前をぶっ殺しても文句無えって事だよな！」

憤った大男が蹴り上げたテーブルの残骸が青年に直撃する。

マイキーが弾き飛ばされると場内には悲鳴が上がる。

「俺に逆らうんじゃないやねえよ！ 逆らう奴は皆こうなるんだ！ よく覚えとけてめえら！」

静まり返る場内。恐怖が支配する空間の中で、そこには立ち上がる一つの影。

その影はゆっくりと大男の元へと歩み寄る。

「何だてめえ、ぶっ殺されたいのか！」

怒声にまるで怯まず近寄った影は男に近付くと、その顔面に唾を吐き掛ける。

「汚い面がこれで少しは綺麗になったか。感謝しろよ」

青年の言葉にわなわたと身を震わせる大男。

「ぶっ殺してやる！」

大男が叫ぶと同時に突き出される手首。青年は軽くそれを片手でいなすと内側に向かって捻じ込む。関節に走る衝撃に自然と身体を折り曲げた男の身体がその場に沈む。

睨み付けるヴァルコイドの形相を物ともせず、膝付いた大男の顔を掴み引き上げる青年。

「お前がこの子の親じゃなくて良かったよ。これで心おきなく潰せるからな」

周囲が息を呑む中、青年が男の顔面に蹴りを入れようとしたその時だった。

そこで灰色の分身達は煙のように消え失せ、そして歪んでいた灰色の空間もまた元の色彩を取り戻し始める。

映し出された光景を前にヴァルコイドはただ呆然と立ち尽くしていた。そんな彼に向かって今言葉を紡ぎ始めるGM。

「ヴァルコイドPLAYER Valcoïd に告ぎます。あなたの行為はARCADIAにおける規約に違反しました」

GMの言葉に怒りと同時に焦燥の表情を向けるヴァルコイド。

「公共良俗に違反する行為、これは他者であるプレイヤーに迷惑を掛ける行為を含みます。また今回の場合は過渡の暴行罪がリプレイ検証により立証されました。よって厳正なるペナルティを付加させていただきます。ペナルティの内容は現実時間において一カ月間アカウントを停止とさせて頂きます。なお、ARCADIAの利用規約により本件は現実に於ける治安機関に報告させて頂きます。またゲーム内において今後あなたの行動は定期的に査定を行うものとし、もし被害者の方々への報復行為、またそれ以外の犯罪の予兆と取れる

言動が確認された場合、同様にペナルティを付加させて頂きます」

GMパトリシアの宣告にヴァルコイドの表情が怒りに歪み始める。

「ふざけるな！ 一ヶ月間のアカウント停止だと？ この世界で言えばそりゃ二年だろうが！」

二年という期間は冒険者にとって致命的な遅れとなる可能性がある。それを恐れたのか、ヴァルコイドはGMに対して脅迫めいた言動を取り始める。

「俺は謹慎処分なんて受けるつもりはねえ。ここでてめえをぶつ殺せばそれで済む話だ。違うか？」

不気味な微笑みを見せるヴァルコイドが銅斧を今片手に振り被り、パトリシアの元へと一直線に駆けて行く。

「死ね、この糞尼が！」

大男のその凶撃に対してGMパトリシアは表情を微塵も変える事は無かった。

ただゆっくりと錫杖を持った右手を掲げると、一語を解き放つ。

「TIME STOP」

タイムストップ

同時にヴァルコイドを中心に空間が収縮し、駆け寄った彼の動きが急速にその動きを緩め地表で停止する。文字通りの停止、瞬きをする事はおろか呼吸をする事さえない。彼の時は完全に止まっていた。

灰色にその彩色を失った彼の姿を見て冒険者達は息を呑む。

「これよりPLAYER Valcoiidをペナルティエリアへと強制転移します」

宣告と共にパトリシアは錫杖をヴァルコイドに差し向けるとその瞬間、彼の身体が光に包まれる。

「転送三十秒前」

一同はただ眼前で執行されるその処罰内容を目視していた。そんな冒険者の中で固まっていたマイキーに対して向き直る

「プレイヤー間に於ける諸処の問題において暴力による解決は本規約では認めておりません。この度のマイキー様の行動は規約に抵触する恐れがあります。今回は直接的な暴力行為に及んでいませんので、口頭による注意という形を採りたいと思いますが今後は呉々もご注意ください」

GMの言葉に無言で頷いたマイキーは強制転移と共に空間の歪みに消えて行く彼女の姿をただじっと見つめていた。

空間内に残された冒険者はただ今起こった出来事を思い返す。いつの間にか砕けたテーブルや椅子は元通りに修復されていた。

取り残された少女はただうるたえながらテーブルに付いたヴァルコイドの連れ、フランススキーを見上げ呟く。

「あの……わたし……」

戸惑う少女に向かって金髪の青瞳の青年はふっと微笑すると、そっと腰を浮かせキティの顎を吊り上げる。

「お前のお陰で飛んだ事態になったね。ヴァルコイドの代わりなんていくらでも見つかる。今までよく働いてくれたね。だけどお前はもう用済みだ。どこへでも行くがいい」

「え……え……」

少女の悲痛な嘆願の眼差しに青年は立ち上がると、連れの水も立ち上がる。

彼はその後見向きもせず、少女に背を向けて立ち去って行った。連れの水ベラは去り際キティに「この役立たずが」と蔑みの視線を残して去って行った。

騒然とする場内の中、取り残された少女の背後では意識を失った青年が医務室へと運ばれて行くところだった。

瞳の涙を溜めながら、青年の後姿に目を沿わせる少女。完全に孤立した少女に残されたのは深い悲しみだった。

今までどんなに辛い状況でこのゲームをプレイしていたのか、恐らく辞めれば現実で危害を与えると脅迫されていたのだろう。この世界でただ虐げられるだけの生活から突然解き放たれた彼女は今完全にその目的を見失っていた。

自分自身どうしたらいいのか、分らず周囲の冒険者に視線で訴え掛けていたその時だった。突然、一人の影が彼女の元へと歩み寄りそっと抱きしめる。

「辛かったね。でももう大丈夫だよ」

美しいブロンドの髪を靡かせるその後ろ姿はアイネに他ならなかった。

「あの……わたし……」涙を溜めて呟く少女の頭をそっと撫でながら笑顔を見せるアイネ。

「大丈夫、これからはお姉ちゃんと一緒に冒険しよ、ねっ？」

その言葉に顔を上げたマイキーがアイネに向かって言葉を掛ける。

「アイネ、お前何考えてる。その言葉の責任分かってるのか」

マイキーの言葉にアイネは振り返ると「分かってるよ」と真剣な眼差しを返す。

「私はアイネって言うの。ねえ、あなたのお名前教えて。年は幾つ？」

「キティ……六才」

少女の言葉にアイネは今一度彼女の頭を撫でるとそっと抱きしめる。

そこへ背後からゆっくりと歩み寄るマイキー。

「六才の少女が自立意志なんて持つてる訳が無い。理由は分からないけどな。彼女がこの世界へ一人で来てる以上、お前の言葉はこの世界での彼女の保護者になるって意味だぞ」

マイキーの言葉に立ち上がるアイネ。

「それなら私保護者になる」

その安易な言葉を聞いてマイキーはその表情を険しくさせる。ジヤックは窓際で香煙草を吸いながらただじつとその成り行きを見守っていた。

「お前、本当に責任取れんのか？」とマイキー。

その言葉に視線でその意志を返すアイネ。キティはただ不安そうにマイキーとアイネの様子を見守っていた。

溜息を漏らしたマイキーはそんなキティに向かって身体を屈めると、真つ直ぐにその瞳を見つめ言葉を掛ける。

「キティって言ったな。始めに言っておく事がある。僕らは連中みたい君を不当に扱ったりしない」

その言葉に無言で頷くアイネ。そしてマイキーはさらに言葉を続けた。

「ただし、僕らは君を特別扱いもしない。対等な冒険者として扱う。それでもいいなら付いて来るか？」

マイキーの言葉にキティは涙目でこくりと頷いた。首を振れる訳も無い。彼女にとってはこの世界では今^{すが}絶れるものは何一つ無くなってしまった。目の前で手を差し延べたアイネの言葉以外に彼女が今頼れるものは無いのだ。

その表情を見てマイキーは再び溜息を漏らすと、そこで初めて優しい微笑みを浮かべた。

「それじゃ、今から君は僕達の仲間だ。僕はマイキー、よろしくな」

マイキーの微笑みかけに不安で表情を歪ませていたキティの表情がそこで初めて緩む。その様子に成り行きを見守っていた周囲の冒険者達からも微笑みが漏れる。

そのときマイキーはふとここまで傍観していた者達の一角へと歩み寄る。

「助かったよ。連中にまさか他にも仲間が居るとは思わなかった。

数にして二十以上、あんたらの牽制が無かったら殺られてたな」

声を掛けられたフェザリオは失笑すると、首を傾げる。

「勘違いしてないか。俺らはただ傍観してただけだぜ」

白を切るフェザリオの傍らでマウスは彼らに向かって優しく微笑みかけた。

そして、キティを連れた勇気ある三名は頭を下げて場内から去っていた。

彼らが立ち去った後でフェザリオはマウスにさも愉快そうに呟く。

「久々に面白いもん見れたな。あいつら居なかったらお前飛び出してっただろ」

「そういうフェザだって、目が完全に切れてたよ」

お互いにそんな想いを確認しながら、再びコーヒーを啜る。

冷めたコーヒーだが、何故だか二人は悪くないと、そう感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8766r/>

ARCADIA ver1.00 美しき裁断者

2011年3月24日14時53分発行